

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 6年 9月 4日

氏名 藤本茉莉恵

所属 教育心理学 コース

指導教員名 植阪 友理

1. 研究課題 クラシック演奏者の楽譜の解釈における自律性—教育的要因と自己調整学習・ウェルビーイングへの影響の検討—

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6年 7月 22日 ~ 令和 6年 8月 4日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

国外 国内

①英語論文公表

②研究科教員の研究プロジェクト参加

③フィールドワーク

④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑥研究指導委託

⑦留学

⑧国際研修

⑨国際インターンシップ

⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記 4 で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<ul style="list-style-type: none"> ・研究発表 ・学会名：International Society for Music Education (ISME), Commission for the Education of the Professional Musician (CEPROM) ・開催地：フィンランド・ヘルシンキ(ISME), エストニア・タリン(CEPROM) ・題目名：Qualitatively Different Faith? Controlled or Autonomous Internalization of <i>Werkreue</i> in Classical Musicians: Cause and Effects ・発表形式：ポスター発表 ・発表年月日：2024年7月29日(ISME), 2024年7月24日(CEPROM) ・発表内容の概要：クラシック音楽の演奏において、プロの演奏家や音楽大学の学生が独自の解釈を自律的に発展させていないということが指摘されている。この要因として、「演奏家は作曲家の意図に忠実に解釈をするべき」(<i>Werktreue</i>)という業界の規範の存在が挙げられている。演奏家が「忠実」とされる模範的解釈から逸脱した演奏をすると不誠実と評されるため、独自の解釈を発展させずに模範的解釈に迎合しているというのである。しかし、解釈における自律性(以下、解釈的自律性)がどのような教育により促進・阻害されるのか、また解釈的自律性がどのように学習者自身の学習行動やウェルビーイングと関連するかは明らかにされてこなかった。 そこで、欧米の音楽大学の学生8名に半構造化面接を行い、どのような学習体験を受けると、解釈的自律性が促進・阻害され、学習やウェルビーイングに影響を及ぼすのかを Model of <i>Werktreue</i> Internalization(Fujimoto & Uesaka, 2024)の枠組みを用いて調査・分析した。結果、基本的心理欲求(Deci & Ryan, 2000)を阻害される心理統制的な学習経験をした学習者は解釈的自律性が阻害され、他律的学習行動をとり、ウェルビーイングも低下していた。一方で、自律性支援的な学習経験をした学生は自律的に学習を行い、適応的に演奏家としてのアイデンティティを獲得していた。 	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
- ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 - ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 - ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

1. 本学術活動の成果

自身の研究をポスター発表することで、ISMEでは様々な関心を持つ研究者と繋がりを広げ、CEPROMではプロを育成する音楽教育に関心を持つ研究者と繋がりを深めることができた。

ISMEでは、欧米の研究者や博士課程の学生に加えて、日本からの研究者とも交流を深めることができ、国内外の音楽教育学者との繋がりを広げることができた。また、セッションの司会を2回担当し、学会運営にも貢献した。

CEPROMでは、7月に掲載された論文(Fujimoto & Uesaka, 2024)の査読者の一人であったProf. Diana Blomと対面で会うことができ、申請者のポスター発表に対して深い議論を行うことができた。また、Johns Hopkins Universityのポスドク生であるDr. Raluca Mateiと互いの問題意識を共有する中で、彼女から来年のアメリカのワシントンDCで開催されるPerforming Arts Medicine Associationでの共同発表に誘われ、共同発表者の誘いを受けることとなった。

2. 本学術活動の成果が研究課題に与える影響

ポスター発表中にコメントや質問を受け、各セッションの合間に音楽教育について議論を重ねる中で、音楽の高等教育に関する問題意識が今まで交流をしたことが無かった国々の研究者(オーストラリア、エストニア、スペイン、ルーマニア、メキシコ等)の間でも共有されていることを実感できた。また、自分が用いている理論や研究の手法が他の研究者にも積極的に活用されていることを知り、自身の研究に対してより自信を持つことができた。そして、2週間という期間の中で、似た研究関心を持つ博士課程の学生にも出会い、自身の研究をより一層進めていくことに意味をより見出せるようになった。さらに、共同発表や共同研究の可能性も広がり、国際的に貢献できる研究者像に一歩近づくことができた。